

# 在宅障害者のライフスタイル

杉岡直人

## 目次

1. 課題へのアプローチ
2. 調査対象と基本属性
3. ライフスタイル変数の設定
4. ライフスタイル基本因子の抽出
5. ライフスタイルの諸類型
6. 結語

## 1. 課題へのアプローチ—ライフスタイル分析の視点—

障害者問題に限らず、一般に福祉に関わる問題のとりあげ方は、「バリアー（障壁）」論を例にとるまでもなく、実践的な課題解決を志向したものが多<sup>(1)</sup>い。このことは福祉実現がわれわれの社会の共通価値（目標）であることを示すものである。福祉研究が政策論的アプローチと実践理論的アプローチによって構成されているのも課題解決志向を端的に表わしているが、それだけにこれまでの福祉政策のあゆみにみられるように、福祉の対象規定に一種の偏<sup>(2)</sup>りがあったといえる。

社会学的認識論において最近のトレンドを生み出しているエスノメソドロロジーやレイベリング理論をみても「日常性」や「相互規定性」の視点を強調しており、本稿でとりあげる障害者の概念規定をめぐる問題を省みると、一般的な理論的視座の転換期を迎えていると考えられる。

「障害者」概念について、上田敏は最近の論稿において、WHOの「国際障害分類（案）」（1980）について修正案を提出<sup>(3)</sup>している。彼は「障害」を包括的な上位概念とし、生物学レベルにおける「機能・形態障害」（impairment）、個人差のレベルの「能力障害」（disability）、社会的存在レベルでの「社会的不利」（handicap）、の3つの下位概念を「障害」

の内部構造を形成するものと位置づけ、それぞれについてWHOの解釈に修正を試みている。

同様の解説は、手塚直樹によってもなされており、「行動障害」の視点を紹介している点で前述した視座の転換にかかわる側面を示している<sup>(4)</sup>。すなわち、非障害者も状況に応じて一時的、短期的に障害者となり、長期的に障害を持つ人々を障害者とする視点である。したがって、行動障害者は、非障害者を含めて「一時的行動障害者」「短期的行動障害者」「長期的行動障害者」に区分されるとする。この見方によれば「行動障害者」は行動を起こすうえで環境との不適応状況を起こすので問題となるのであるから、環境の方を改善していけば、行動障害は相対的に減少してくる<sup>(5)</sup>ことになる。

こうした「障害者」概念の転換を準備したのは Wright や Dunham らの研究によるところが大きいと考えられる。Wright は「疾病にもとづく神話が、素人と専門家を歎いていた<sup>(6)</sup>」と主張している。「一般的な不適応 (general maladjustment)」「非劇 (tragedy)」「増大する欲求不満 (excessive frustration)」「罪 (sin)」の4つを神話 (myth) であるとし、障害をもっていることが、そのまま4つの神話に結びついていることを強調している。Wright によれば「disabled person (障害をもたされた人)」というより「the person with a disability (障害のある人)」というべきで身体的な障害が「全体としての人 (whole person)」を損うものではないと論じている<sup>(7)</sup>。この意見なども disability から handicap への移行を示唆するものである。

Dunham もまた、こうした見解に支持を与え disability と handicap を区別すべきであるとしており、障害者 (disability person) は「事故や疾病、発達上の問題によって、普通の人々と構造的、身体的、心理学的に異っている人」をさし、ハンディを背負った人々 (the handicapped) は「一般的、あるいは特定の状況の下で他の人々よりも十分 (adequate) ではないと感じている」ことを指摘している。すなわち、「disability は handicap である必要はない」というものである<sup>(8)</sup>。

われわれもまた、こうした一連の視座の転換を積極的に支持するものである。本稿の目的は、かかる問題に対して、生活構造分析の枠組を用いて、在宅障害者のライフスタイルを明らかにすることである。ここで

いう生活構造とは、われわれの日常的な生活の営みの上で自らがかわる社会的資源（財）の主体的統合による結果であり、家族や収入をはじめとして生活意識や社会関係、生活行動にかかわる社会財によって構成されているものとする。この生活構造はそれ自体、われわれの生活目標に向かう主体的な統合によって方向づけられるが、その方向づけをおこなう主導的な要素をライフスタイルとして概念化する。もともとライフスタイルとは、M. Weber や A. Adler によって使用され始めたものといわれているが、アメリカでの社会階層に関するライフスタイルアプローチがまずとりあげられたことを想起すべきであろう。つまり、異なる社会階層が身につけた態度 (attitude) や信念 (belief) のある体系をもって生活するスタイルを確立するマナーのことをライフスタイルというのである。ライフスタイル分析は、生活様式、行動様式などの社会文化的な差異を問題にしてきたのであるが、最近では、消費者行動や生活行動のレベルにおける特性を予測するものとして、習慣的な側面や価値観、生活意識にわたる多次元的な尺度の構成によって研究が展開されている。井関利明は「ライフスタイルとは、生活主体が、①生活の維持と発展のための生活課題を解決し、充足する過程で、②自らの独自の欲求性向から動機づけられ、③自らの価値態度、生活目標、生活設計によって方向づけられ、④外社会（企業、政府、地域社会など）が供給する財・サービス・情報、機会を選択的に採用、組み合わせ、⑤社会、文化的な制度的枠組からの制約のなかで、⑥日々、週、月、年あるいは一生のサイクルを通して、能動的、主体的に設計し、発展させていく、⑦生活意識と生活行動と生活構造の3つの次元から構成されるパターン化したシステムである」とする。

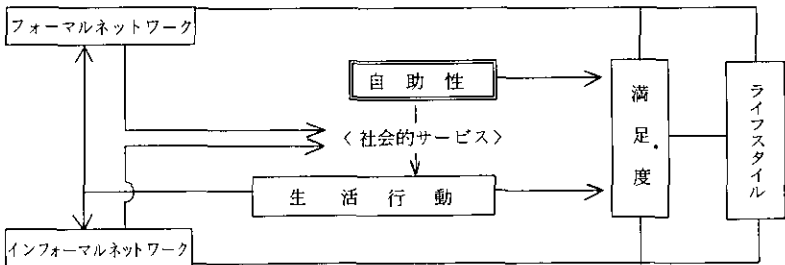
本稿で扱うライフスタイル概念の発想は、こうした考えに多くを負っているが、具体的な分析図式はかなり異なったものである。

図1はライフスタイル分析の枠組を示したものである。まず、在宅障害者の場合、「自助性」に一定の制約条件を与えられながら生活主体として、生活課題の解決及び欲求充足をはかることになるが、それは、周囲の環境条件に対する満足度と、生活行動領域における展開を求めることになる。この生活行動は、一方において満足度に結びつき、他方においてフォーマル、インフォーマルネットワークを形成していくが、そのネ

ネットワーク自体は各種の社会的サービスを生活主体に提供するものとして自助性をサポートすることになる。例えば、家族、友人、近隣ネットワークによる介助や社会的諸機関からのサービスをうけることがあげられる。そうしてこのネットワークを通して満足度をたかめ、ライフスタイルを構成していくのである。ライフスタイルとは自助性を出発点とする、生活行動、フォーマル、インフォーマルネットワーク、満足度によって説明される価値と態度のパターンをつくり出すものである。むしろ、いったん形成されたライフスタイルは、その主体の価値標準にもとづいて、ネットワークの維持、形成や満足度の内容を方向づけていくのである。

ここでいう自助性は、自己の生活目標実現にとって障害となっているものに対する自己解決能力の水準を示すものと定義づけることができる。したがって筆者は自助性もまた、非障害者にとっても同じレベルで扱うことが可能であり、必要であるという意味で、ここに示した図式をライフスタイル分析のパラダイムとして位置づけようと思う。

図1 ライフスタイル分析のフレームワーク



われわれは、このライフスタイル・アプローチを用いて、在宅障害者の生活を理解する新たな地平を切り拓こうとするものである。福祉の限定された対象として障害者を取り上げることでなく、非障害者と同じレベルで彼らの生活に接近することが実践的課題の解決に対する出発点と考えるからである。

とくに、施設ではなく地域社会のなかで生活することを希望する障害

者の人々に積極的に援助・協力することが求められており、そうした環境的条件を整備していくことが、アメリカなどでも福祉政策の趨勢となっていることを考慮するなら、トータルな意味での「人間の福祉向上」を共通価値とするコミュニティを扱う「コミュニティ科学」の推進にとっても一つの貢献をなしうるものである。<sup>14</sup>

## 註

- (1) 「社会福祉とは人間が、社会生活を営むうえにおいて望まれる共同の福祉を、共同の社会的基盤において確保しようとする、社会的な実践体系である」省部猛利「福祉社会学」社会学辞典1958, 783頁
- (2) 竹中和郎「社会福祉と社会学」松原治郎・副田義也編『福祉社会学』川島書店1966, 213—37頁
- (3) 上田敏「『障害』および『障害者』概念の変遷」ジュリスト総合特集NO.24『障害者の人権と生活保障』1981, 40—44頁
- (4) 手塚直樹「障害者福祉論」光生館1981, 43—44頁
- (5) *ibid.*, p 44
- (6) Wright A Beatrice, "Some Psychological Aspects of Disability." David Malikin & Herbert Pusalem (eds.), *Vocational Rehabilitation of the Disabled: An Overview*. New York: New York Univ. Press, 1969, p 91
- (7) *ibid.*, p p 91—103
- (8) Jerome R. Dunham & Charlis S. Dunham, "Psychological Aspect of Disability," Robert M. Goldenson. & Jerome R. Dunham and Charlis S. Dunham (eds.), *Disability and Rehabilitation Handbook*, New York: McGraw-Hill Book Company, 1978. pp 12—20
- (9) 井関利明「ライフスタイル概念とライフスタイル分析の適用」村田昭治他編著『ライフスタイル全書』ダイヤモンド社1979, 3—41頁
- (10) "life styles" Melvin M. Tumin (ed.) *Readings on Social Stratification, (Readings in Modern Sociology Series)*, New Jersey; Prentice-Hall Inc, 1970, pp 179—226
- (11) 井関利明, *op.cit.* pp 3—41
- (12) *ibid.*, pp 15—6
- (13) 岡村重夫「心身障害者のコミュニティ・ケア」『地域福祉論』光生館: 1974, 140—60頁
- (14) 青井和夫「理論社会学の性格」尾高邦雄・福武直編『20世紀の社会学』ダイヤモンド社1965, 5—59頁

## 2. 調査対象と方法

調査対象は、北海道千歳市の在宅障害者のうち、身体障害者手帳の登録台帳をもとに、重度の障害に属する1～4級までの980人のうち表1に示したように5つの障害種類を合わせて246人を対象として、1981年8月16日～20日にかけて個別面接調査を実施した<sup>(1)</sup>。回収状況はきわめて良く「肢体不自由」の64%をのぞけば、すべて80%以上で全体の回収率は74.8%である。調査ができなかったのは止むえないケースに限定されている。このことは、調査不能の理由をみてもわかるように、入院や施設入所しているケースが15と多く、転居と合わせると24ケースである。「その他」とは「住所不明」「不在」のケースである。

表1 回収結果

障害の種類	千歳市全体	調査対象母集団	サンプル数	回収サンプル	回収率(%)	調査不能	不 能 理 由					
							拒否	転居	長期不在	入院	施設入所	その他
聴覚障害	115	85	34	28	82.4	6		1				5
視覚障害	133	104	31	28	90.3	3		1	1	1		
精神障害	364	164	27	22	81.5	5		1				4
内部障害	44	43	29	26	89.7	3			1	1		1
肢体不自由	590	434	125	80	64.0	45	3	6	5	10	3	18
重複その他	22	19										
計	1268	849	246	184	74.8	62	3	9	7	12	3	28

表2は障害の種類別に属性との関連を示したものである。 $\chi^2$ 検定の結果は年齢、障害等級、職業の有無について差のあることを指摘している。年齢についてみると聴覚障害者は中年層が多く、視覚障害者は青年層と高齢層に分かれており、精神障害者には若い人が多い。また、内部障害者は中高年層、肢体不自由者には高齢者層が多い。障害の等級については、内部障害者と視覚障害者は特に重度のケースが多いのに対して肢体不自由者は3、4級の割合が高い。職業については、内部障害者に無職のケ

在宅障害者のライフスタイル

ースが多く、肢体不自由者もまた無職の方が多い。

就業率についてふれるならば、本調査では47.5%であるのに対して、昭和55年2月の「身体障害者実態調査結果」(厚生省)によると全国で32.3%、全道では36%である。

なお、以下において、精神障害(薄弱)者は分析過程から除かれている。その理由は、本人の生活意識に関する意見聴取がむつかしいためである。

分析の手順は、まず、1)ライフスタイル変数の設定をおこない、属性による分散分析とライフスタイル変数の相関行列について考察し、2)因子分析を用いてライフスタイル基本因子を抽出し、3)更にケースごとの因子スコアを用いてクラスター分析によって、ケース分類をおこない、このライフスタイルによる基本因子の分散分析と、諸属性とのクロス表分析からライフスタイルセグメントをまとめる。4)最後にライフスタイルアプローチによって提出される在宅障害者の生活課題パラダイムを構想する。

表2 障害の種類と基本属性

障害の種類	合計	性別		年齢					障害等級				就業状況		
		男	女	~29	30~39	40~49	50~59	60~	1	2	3	4	有	無	休職中
聴覚障害	28	15	13	3	6	12	5	2	2	13	9	4	20	8	
視覚障害	28	14	14	7	6	1	7	7	12	13	1	2	17	11	
精神障害	22	14	8	12	7		2	1					13	9	
内部障害	26	17	9	2	3	7	9	5	15		7	4	5	20	1
肢体不自由	80	40	40	9	11	15	27	18	2	18	17	40	33	47	
計	184	100	84	33	33	35	50	33	31	44	34	50	88	95	1
$\chi^2$ 検定						**			**				**		

\*\* =  $P < .01$

註

- (1) 調査報告書の内容は以下の通り。1.「生活行動と生活満足度」(井上かおり)
- 2.「職業キャリアと生活満足度」(工藤敏司) 3.「就労意欲と生活満足」(村本真史) 4.「職業と就業プロセス」(佐藤こずえ) 5.「就労条件と就労意欲」(加藤悟志) 6.「職業と生活に関する住民意識」(長沼修) 千歳市社会福祉協議会「千歳市在宅障害者生活実態調査報告書」1982

## 3. ライフスタイル変数の設定

ライフスタイルを「生活主体のセルフ・コンセプトと生活目標を中核とする環境認知と生活課題の解決および充足のしかたの総体<sup>(1)</sup>」とするならば、われわれが取り上げる在宅障害者のライフスタイルにとって基本におかなくてはならないのは、生活主体の行動レベルにおける制約的条件の存在である。前述したように5領域を基準とし、表3に示した22変数をライフスタイル変数とする。

表3 ライフスタイル変数群

領域	項 目	変数名
1. 自 助 性	① 食事 ② 排便 ③ 入浴 ④ 衣服の着脱 ⑤ 家の中での移動 ⑥ 郵便局・銀行 ⑦ とまりがけの旅行 ⑧ 通勤 ⑨ 来客の応対 ⑩ 電話のうけとり ⑪ その他	ADL
2. 生 活 行 動 ( 頻 度 )	① 買物 ② 余暇活動 ③ サークル活動 ④ 仕事 ⑤ 知人・友人宅の訪問 ⑥ 通院・通所 ⑦ 市役所 ⑧ 郵便局 ⑨ とまりがけの旅行	P1-P9
3. インフォーマルな ネットワーク(量)	① 経済的にゆきつまった時 ② 家の留守中のことなどを頼む時 ③ 急病人がでて家事などに困った時 ④ 評判のよい店や医者情報を得る時 ⑤ なにかの保証人になってもらう時 ⑥ 家族のことについて相談する時 ⑦ 仕事や就職の上での悩みを話す時 ⑧ 気楽に自分のことを話したり聴いたりしたい時 ⑨ 人生や生き方について話す時	DFAM DKIN DNEB DFRD
4. フォーマルな ネットワーク(量)	① 福祉事務所 ② 市役所 ③ 保健所 ④ 図書館 ⑤ 社会福祉協議会 ⑥ 公共職業安定所 ⑦ 機能回復訓練の施設 ⑧ 民生委員	TINST
5. 生 活 満 足 度	① 家族一緒に行う余暇活動 ② 自分一人で行なう余暇活動 ③ 友達とのつきあい ④ 仕事について ⑤ 収入について ⑥ 睡眠時間について ⑦ 家庭生活について	R1 R2 R3 R4 R5 R6 R7



ここで各領域から導かれた変数について整理しておくなら、まず「自働性」インデックスは、領域内に示した各介助項目11について介助の必要のないものの数をカウントしたものである。むろん障害の種類や等級のちがいによってそれぞれ異なる介助パターンが考えられるが、ここでは便宜的に一律に介助の有無のみを基準としている。

外出目的別の生活行動は、P1～P9の9つの項目によって構成され、「毎日」(8)「週に2～3回」(7)、「週に1回」(6)、「月に2～3回」(5)、「月に1回」(4)、「年に数回」(3)、「年に1回」(2)、「全くなし」(1)とウェイトづけをおこなった。

インフォーマルなネットワークの量については、9項目のそれぞれについて、家族、親族、近隣、友人を選択したものの総和を「家族依存ネットワーク量」(DFAM)「親族依存ネットワーク量」(DKIN)「近隣依存ネットワーク量」(DNEB)友人ネットワーク量(DFRD)の4変数によって代表させた。したがって、それぞれの最小値は0、最大値は9となる。

また、フォーマルなネットワークの量については、8項目を用いてそれぞれについて「よく利用する」「利用することがある」と答えたものの合計をTINSTとした。最小値は0、最大値は8である。

生活満足度は、R1～7の7項目によって構成し、それぞれ「満足」(4)「どちらかという満足」(3)「どちらかという不満」(2)「不満」(1)とウェイトづけをおこなった。

属性には「性」「年齢」「障害の種類」「職の有無」「世帯収入」「家族構成」「個人のライフサイクル」の7変数を取りあげる。

表4は7つの属性によるライフスタイル変数の分散分析の結果を示したものである。要約すると、個々のライフスタイル変数に対して説明力のある属性は多くはなく、「職業の有無」によって異なるものが多い。その他「年齢」「性」「ライフサイクル」「家族収入」があげられるが、説明しうる変数は限られている。

右欄の「ライフスタイル」は、後にクラスター分析によってケース分類をおこなってえた変数である。ライフスタイルの20変数を因子分析によって取り出した7つの基本因子からえたものであるから強い関連を示しているが、因子分析に用いられなかったP4、R6とは有意な差がみら

れない。

表 4 属性によるライフスタイル変数の分散分析結果 (E T A 値)

	障 種	性	年 齢	家 構 族 成	ラ サ イ ク ル	職 有 の 無	家 取 扱 入	ラ ス タ イ ル
P 1	.19	.22**	.34**	.28*	.23	.10	.21	.33**
2	.09	.24**	.37**	.19	.34*	.27**	.21	.75**
3	.35**	.21**	.29*	.25	.37**	.23**	.14	.54**
4	.13	.01	.14	.16	.20	.10	.11	.22
5	.13	.04	.25	.14	.22	.19*	.27*	.53**
6	.41**	.02	.28*	.13	.30	.27**	.11	.31**
7	.15	.13	.18	.11	.31	.22**	.15	.39**
8	.17	.02	.22	.14	.23	.16	.12	.40**
9	.17	.15*	.16	.18	.29	.22**	.30**	.64**
T I N S T	.18	.10	.24	.09	.26	.04	.26*	.30*
R 1	.13	.05	.19	.24	.37**	.03	.22	.51**
2	.11	.08	.16	.15	.20	.10	.16	.48**
3	.11	.04	.22	.11	.23	.05	.08	.44**
4	.28**	.33**	.31**	.17	.48**	.37**	.24	.49**
5	.16	.03	.19	.23	.32**	.09	.27*	.37**
6	.07	.05	.14	.14	.26	.06	.17	.22
7	.13	.02	.20	.23	.23	.10	.19	.63**
A D L	.19	.11	.22	.19	.27	.21**	.17	.32**
D F A M	.05	.06	.12	.32**	.29	.04	.38**	.71**
D K I N	.15	.04	.18	.20	.29	.04	.25*	.34**
D N E B	.19	.11	.18	.12	.19	.12	.15	.38**
D F R D	.15	.05	.29*	.21	.26	.18*	.21	.45**

\* = P < .05

\*\* = P < .01

ところで、とりあげたライフスタイル変数をもとに、まず因子分析をもちいてライフスタイル基本因子を抽出することになるが、その準備作業として、ライフスタイル変数間の関連を表5に示す相関行列をもとに概観しておく。

全体として生活行動領域、生活満足度領域のそれぞれの変数間の相関がみとめられる。またフォーマルなネットワーク量をあらわすT I N S Tは、生活行動領域と関連がみられ、自助性を示すA D Lは生活行動と

表5 ライフスタイル変数の相関行列

\* = p < .05    \*\* = p < .01

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	TINST	R 1	R 2	R 3	R 4	R 5	R 6	R 7	ADL	DFAM	DKIN	DNEB	DFRD	
P 1		.21**	.10	.13	.32**	.03	.26**	.45**	.16*	.14*	-.13*	.11	.04	.08	-.04	-.06	-.03	.22**	-.12	.03	.09	.11	
2			.54**	.13	.29**	-.11	.28**	.33**	.39**	.26**	-.02	.14*	.07	.21**	-.07	-.10	-.05	.14*	-.17*	-.03	-.13	.27**	
3				.09	.18*	-.20**	.33**	.19**	.27**	.31**	.02	.06	.09	.18*	.01	-.08	.02	.03	-.17*	-.09	-.05	.20**	
4					.12	-.02	.04	.13	.07**	.07	.15*	.17*	.11	.09	.02	.01	.08	.02	-.06	-.04	.01	.01	
5						.00	.43**	.41**	.37**	.14*	.08	.25**	.33**	.15*	.02	.00	.14*	.21**	-.25**	.08	.05	.39**	
6							.04	.05	-.02	-.01	.04	-.03	-.09	-.21**	.04	.04	.03	.01	-.04	.18*	.02	.02	
7								.53**	.23**	.29**	-.14*	.05	.11	.07	-.07	-.13*	-.06	.17*	-.22**	-.13	.08	.31**	
8									.22**	.16*	-.04	.22**	.15*	.14*	.06	-.05	.14*	.24**	-.07	-.03	.16*	.17*	
9										.18*	.25**	.15*	.17*	.18*	.05	.05	.15*	.06	-.08	.13	-.13	.18**	
TINST											-.10	-.03	.08	-.01	-.06	-.10	-.07	-.00	-.17*	-.10	.08	.21**	
R 1												.27**	.27**	.15*	.21**	.15*	.51**	-.02	.18**	.07	-.12	.01	
2													.42**	.19**	.20**	.12	.34**	.26**	.07	.00	-.11	.07	
3														.13*	.23**	.16*	.41**	.16*	-.15*	-.02	.03	.28**	
4															.30**	-.00	.10	.15*	.01	-.02	-.12	.12	
5																.20**	.41**	.04	.19**	-.03	-.18*	-.11	
6																	.33**	.18*	.00	.01	.03	-.06	
7																		.13	.09	.06	-.02	.08	
ADL																			-.04	-.02	.03	.15*	
DFAM																					-.32**	-.28**	-.46**
DKIN																						-.02	-.15*
DNEB																							-.05

在宅障害者のライフスタイル

生活満足の両方に関連がある。すなわち自助性が高いほど買物(P1)「友人訪問」(P5)「郵便局」(P8)などの日常行動の頻度が高く、自分1人の余暇活動に対する満足(R2)や睡眠時間の満足(R6)と正の相関がみられる。

インフォーマルなネットワークの量のうち家族(DFAM)親族(DKIN)近隣(DNEB)は他の変数に対して負の相関を示しており、とくにDFAM(家族依存度)はその傾向が強くみられる。したがって、DFAMの値が高い人は、生活行動も消極的で満足度もそれほど高くないと考えられる。ただ満足度については、家族一緒の余暇活動(R1)や収入(R5)には正の相関がみられ、友人つきあい(R3)には負の相関を示している。

このDFAMと対照的なのが友人依存度(DFRD)であり、生活行動についても、友人関係満足(R3)に関しても正の相関を示している。また、よく指摘されることであるが、生活行動と生活満足はそれほど高い相関はみられず、友人宅への訪問(P5)および郵便局へ出かけること(P8)が生活満足度と正の相関をみることができるとはすぎない。また生活満足度の側からみると、一人でする余暇活動(R2)や仕事(R4)が生活行動と関連がある。

ここで取り上げる5領域の相互の関連はほぼ明らかにしたが、このうちP4とR6とは他の変数との関連性が低く、また最初の因子分析の結果、共通性( $h^2$ )が低く、尺度として適当とはいえなかったため、つぎに展開する因子分析のなかからは除かれている。

#### 註

- (1) 井関利明「消費者ライフスタイルの変化とその動向」『日本社会学会大会報告要旨』1981、322-3頁

## 4. ライフスタイル基本因子の抽出

ライフスタイル変数の相互の関連を概括したのでその20変数を用いて共通性の反復推定の主因子解による因子分析をおこない、ライフスタイルの基本因子を取り出すことにする。

在宅障害者のライフスタイル

表6はバリマックス回転後の因子行列を示したものである。この結果表にもとづいて7つのライフスタイル基本因子の各特性を整理するにあたりP6, TINST, R5, DNEB, ADL, の5変数は共通性( $h^2$ )が低いために考察から除いた。各因子の寄与率をみると、3因子によって70%が説明されているので、通常であれば特に7因子をとりあげる必要はないのであるが、本研究の場合、ライフスタイルの多次元性を重視するためにあえて7因子(固有値, 1.0以上)を用いた。そして次のように名称を設定した。

表6 バリマックス回転後の因子行列

		I	II	III	IV	V	VI	VII	$h^2$
R	7	<b>.808</b>	.043	-.016	-.002	.023	-.063	-.009	.660
R	1	<b>.657</b>	-.120	.060	-.039	.063	.181	-.068	.493
R	3	<b>.574</b>	.169	.047	.299	-.029	-.102	.131	.478
R	2	<b>.472</b>	.287	-.022	.061	.006	.116	.155	.347
P	8	.108	<b>.758</b>	.251	-.062	-.042	-.139	-.033	.675
P	1	-.042	<b>.543</b>	.119	.008	.068	-.053	.005	.318
P	5	.213	<b>.519</b>	.243	.319	.106	.048	-.048	.492
P	7	-.051	<b>.507</b>	.403	.173	-.125	-.117	-.074	.487
P	3	.020	.039	<b>.738</b>	.039	-.032	-.006	.271	.622
P	2	-.097	.248	<b>.592</b>	.122	.073	.235	.190	.532
P	9	.239	.209	<b>.440</b>	.084	.196	.274	-.041	.416
DFRD		.070	.179	.221	<b>.773</b>	-.121	.068	-.024	.703
DKIN		.060	.009	-.063	-.042	<b>.763</b>	-.012	-.129	.608
DFAM		.185	-.042	-.187	-.632	-.491	<b>.438</b>	-.060	.908
R	4	.186	.181	.079	.036	.050	.191	<b>.519</b>	.383
P	6	-.027	.063	-.114	.014	.133	.014	-.426	.217
TINST		-.032	.110	.422	.117	-.092	-.124	-.039	.231
ADL		.096	.387	-.062	.111	-.015	.028	.129	.193
R	5	.451	.038	-.085	-.146	-.019	.076	.255	.305
DNEB		-.060	.112	-.018	.016	.010	-.547	-.097	.325
寄与率(%)		35.1	22.1	13.0	10.5	8.4	5.6	5.3	100.0

- I. 余暇, 人間関係満足因子 (R7, R1, R3, R2)
- II. 日常行動因子 (P8, P1, P5, P7)
- III. 余暇活動因子 (P3, P2, P9)
- IV. 友人ネットワーク依存因子 (DFRD)
- V. 親族ネットワーク依存因子 (DKIN)

## VI. 家族ネットワーク依存因子 (DFAM)

## VII. 仕事満足因子 (R4)

この7因子についてケースごとの因子得点を求め、さらに各因子に固有値をかけてスコア値の修正をおこなった。そして7つの属性によって各因子の分散分析をおこなった結果を示したのが表7である。この表7によればIII, VIIの2因子について、特に職の有無, 年齢, 家族収入の属性による差が特徴的にみられる。一方, 家族構成による差はみとめられず, 年齢と相関の高いライフサイクルともあまり関連はみとめられない。また, 基本因子と障害の種類の間にもそれほど関連はみとめられない。また表7下段のライフスタイルは後にクラスター分析によってケース分類をおこなってとりだされた6つのライフスタイルのことである。詳細は後段で展開する。

表7 属性によるライフスタイル基本因子の分散分析結果 (ETA値)

	I	II	III	IV	V	VI	VII
障 害 種 類	.11	.14	.31**	.12	.04	.11	.31**
性	.00	.03	.23**	.05	.03	.14	.24**
年 族 構 成	.24	.26*	.29*	.21	.14	.22	.32**
家 族 構 成	.23	.16	.18	.27	.19	.15	.26
ライフサイクル	.32	.26	.33*	.29	.28	.20	.41**
職の有無	.01	.25**	.19*	.10	.02	.26**	.61**
家族収入	.27*	.14	.19	.31**	.23	.34**	.13
ライフスタイル	.72**	.41**	.64**	.47**	.51**	.42**	.43**

\* = P &lt; .05

\*\* = P &lt; .01

## 5. ライフスタイルの諸類型

つぎに, 7因子を用いて, 主成分分析併用のQモードクラスター分析をおこなった。この方法は主成分得点の各成分ごとに正規化した値であるFijを使い, ケースiとkの距離行列を求め, 最も近いケースどうしを結合させ, 1つのクラスターを構成し, 順次, ケースあるいは, クラスター間の距離を計算して最終的に全ケースを結合して樹状図を作成するものである。抽出された成分は2個で全体の80%を説明しており第1成分による寄与率は70.6%, 第2成分が9.6%であった。この2成分ととりだした6つのクラスターからなるライフスタイルとの分散分析の相関比

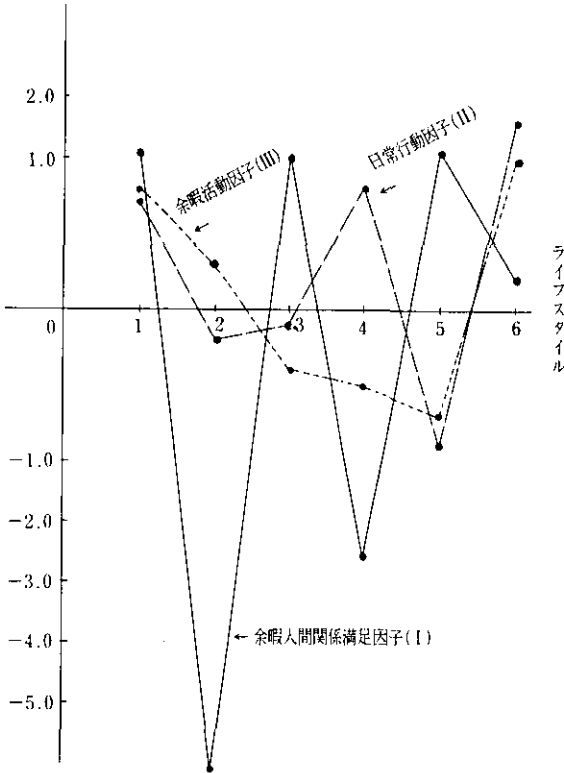
の値（ETA）は、第1成分が0.919、第2成分が0.742であり、一応満足すべきものである。

ところで、このクラスター分析によって得られた6つのライフスタイルは、それぞれどんな特徴をもっているのかを確かめなくてはならない。いわゆるライフスタイルセグメントの特性である。そのためには、ライフスタイルの基本因子（Ⅰ～Ⅶ）のそれぞれについて、ライフスタイルによる分散分析をおこない特徴を明らかにする必要がある。むろん、両者は親子関係にあるわけだから高い相関を示すが、相関比の値（ETA）も表7に示したように7つの基本因子に対して、それぞれⅠ：0.719、Ⅱ：0.406、Ⅲ：0.640、Ⅳ：0.471、Ⅴ：0.513、Ⅵ：0.424、Ⅶ：0.425、と高い値を示している。

ここで、各基本因子とライフスタイル別の特徴を図2、図3によって概括してみよう。

図2は生活行動と意識に関するⅠ：余暇、人間関係満足因子、Ⅱ：日常行動因子、Ⅲ：余暇活動因子、の3つについて分散分析による平均値をとって各ライフスタイルごとにプロットにしたものである。これをみるとⅠ因子の平均差が大きく、Ⅱ因子とⅢ因子がライフスタイルの4をのぞいてやや似た動きをしているのがわかる。しかもⅠ因子とⅡ、Ⅲ因子は対極的な関係をみせている。これは、意識（Ⅰ）と行動（Ⅱ、Ⅲ）が乖離していることのあらわれで、さきに表1でライフスタイル変数の相関行列を考察したときに得られた特徴を想起することができる。こうした関係にある3つの基本因子を総合的に特徴づけをするならば、ライフスタイル1はすべてに高い位置にあり安定している。いわば「満足・余裕型」といえる。ライフスタイル2は特にⅠ因子の「余暇・人間関係満足」は低いが、余暇活動には積極的であり「不満足・余暇活動型」とみなせる。ライフスタイル3については、満足度（Ⅰ）は高いが余暇活動（Ⅲ）や日常行動（Ⅱ）はそれほど目立たなく「平均的満足型」といえる。ライフスタイル4は、満足度（Ⅰ）、余暇活動（Ⅲ）ともに低いが買物（P1）や郵便局（P8）、市役所（P7）、友人宅への訪問（P5）などの日常行動はかなり活発におこなっている「生活中心不満足型」といえる。ライフスタイル5は、余暇・人間関係に対する満足度（Ⅰ）は高いが、活動面（Ⅱ、Ⅲ）では最も低く、あまり外出をしない「自宅満足」

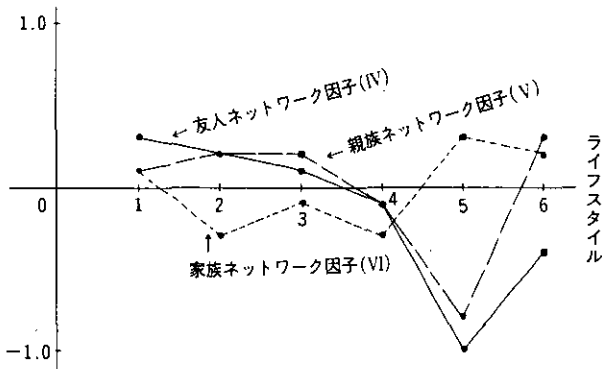
図2 ライフスタイル基本因子 (I~III) とライフスタイル



である。もっとも、外出をしないのは外出をしたくてもできないのが問題なのであって自助性 (ADL) についてみると平均10.0に対して9.8と有意差があり、介助を必要としている人が多く図3にみられるように家族依存度 (VI因子) も高い。最後のライフスタイル6は、すべて有職者で構成されている。どちらかといえばライフスタイル1に似ている。ただ、日常行動や余暇活動は積極的であるが満足度はそれほど高くない。若い世代によくみられるタイプで「積極活動型」というべきものである。この点に関して、いますこし考察するなら、図3はライフスタイル別にみたインフォーマルなネットワークに対する依存度を示している。全体



図3 ライフスタイル基本因子 (IV～VI) とライフスタイル



として家族依存度因子 (VI) が他の 2 つの因子に比べて異なる位置にあることがわかる。特にライフスタイル 2 や 5 については、これらの因子は対照的な関係にあり、前者の場合は家族依存度が最も低く、後者の場合は最も高いという特徴を示している。ライフスタイル 5, 6 は友人に対する依存度も低く家族・親族ネットワークに傾斜している。

それではこうしたライフスタイルの特性はどんな人によって構成されているのか。属性と各ライフスタイルの関連を示したのが表 8 である。この他にも家族構成、ライフサイクル、家族収入、などの属性との  $\chi^2$  検定をおこなったが、いずれも有意水準 5% で関連のあるものは認められなかった。ちなみに 6 つのライフスタイルに対する各属性の有意水準は家族構成が 65%、家族収入が 14%、ライフサイクルが 10% であり、少なくとも家族構成については関連があるとはいえない。表 8 によれば、「障害の種類」による差は 5% 水準で認められなかったが、5.4% では有意差があり、まず関連があるとみなしてさしつかえない。したがって、ライフスタイルを属性との関連でとらえると、性や年齢といった帰属的地位を構成するものだけでなく、職業や障害の種類などによって特徴づけられていることがわかる。このことは、同じ「障害者」というカテゴリーにあってもライフスタイルについては「障害の種類」によって異なること、及び「職業についているかどうか」が重要な関連をもっていることを示しており、この 2 つの要素をぬきにした議論はできないといえる。

表8 ライフスタイルと基本属性

(単位:%)

	人数	性別		年齢					障害種類				職の有無	
		男	女	20代	30代	40代	50代	60代	聴覚	視覚	内部	肢体	有無	
													有	無
I満足・余裕型	46	69.6	30.4	21.7	21.7	15.2	30.4	10.9	28.3	19.6	8.7	43.5	69.6	30.4
II不満足・余暇活動型	6	66.7	33.3	16.7	33.3	33.3	16.7	0.0	33.3	0.0	0.0	66.7	66.7	33.3
III平均的満足型	51	39.2	60.8	3.9	15.7	25.5	39.2	15.7	13.7	23.5	17.6	45.1	38.0	62.0
IV生活中心不満足型	27	44.4	55.6	7.4	14.8	25.9	22.2	29.6	7.4	3.7	22.2	66.7	18.5	81.5
V満足自宅型	22	45.5	54.5	9.1	4.5	13.6	22.7	50.0	9.1	18.2	27.3	45.5	22.7	77.3
VI積極活動型	10	80.0	20.0	40.0	10.0	30.0	20.0	0.0	20.0	20.0	10.0	50.0	100.0	0.0
N=(人)	162	86	76	21	26	35	48	32	28	28	26	80	75	86
$\chi^2$ 検定		*		**									**	

\* = P &lt; .05

\*\* = P &lt; .01

表9 障害の種類とライフスタイル (単位:%)

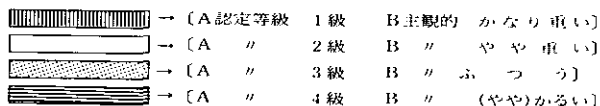
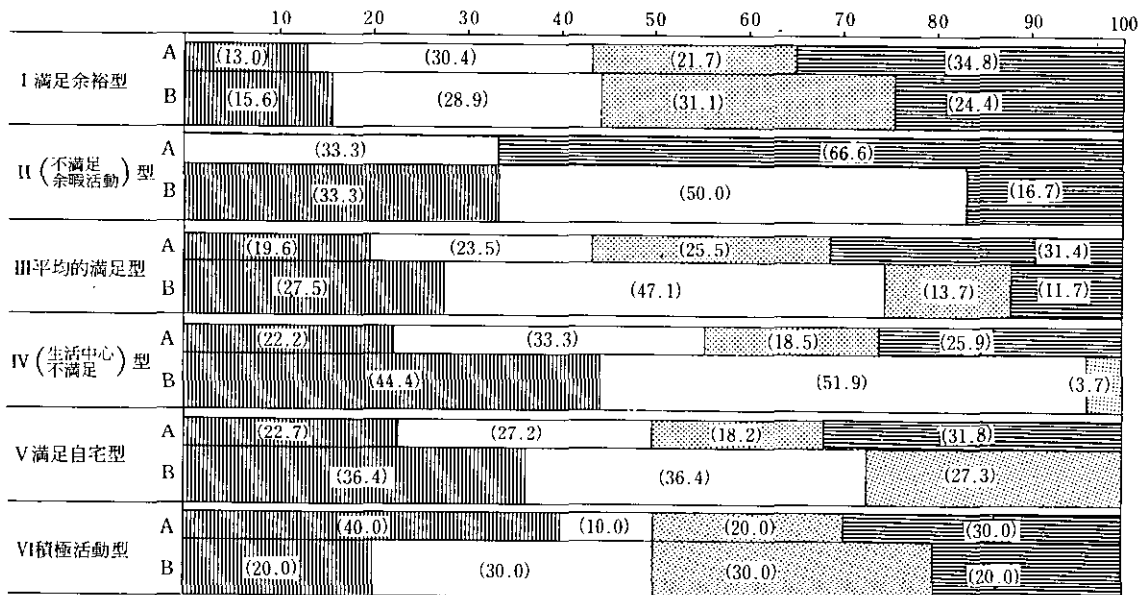
障害の種類 ライフスタイル	聴覚 障害	視覚 障害	内部 障害	肢体 不自由
I満足・余裕型	46.4	32.1	15.4	25.0
II不満足・余暇活動型	7.1	0.0	0.0	5.0
III平均的満足型	25.0	42.9	34.6	28.8
IV生活中心不満足型	7.1	3.6	23.1	22.5
V満足自宅型	7.1	14.3	23.1	12.5
VI積極活動型	7.1	7.1	3.8	6.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0

まず、I「満足・余裕型」は全体の約 $\frac{1}{3}$ (46人)である。そのうち70%は男性である。年齢層は50代に多いが、他のライフスタイルに比べて分散している。「障害の種類」別では、肢体不自由者が全体で80人と多いために構成比はすべて肢体不自由者が高い割合を占めることになり、「障害の種類」ごとに各ライフスタイルの構成をとらえることも必要である。(表9参照)この「満足・余裕型」は「肢体不自由」と「聴覚障害」によって約70%が占められており、約7割が職業についている。

II「不満足・余暇活動型」は前者と同様、約70%が男性によって占められている。また年齢グループでは30、40代の人約7割を構成している。60代の人1人もいない。障害の種類は「聴覚障害」と「肢体不自由

図4 ライフスタイルと主観・客観的等級

(単位：%)



在宅障害者のライフスタイル

表10 ライフスタイルセグメント特性

ライフスタイル	人数	基本因子からみた 特 徴	性	職の有無	主観的 障害の程度	年 齢
I満足・余裕型	46	余暇・人間関係満足高く活動も積極的	男	有	軽い	20, 30, 50代
II不満足・余暇活動型	6	不満足が強く家族ネットワークも少ないか活動は積極的	男	有	やや重い	30, 40代
III平均的満足型	51	満足度が高いほかはすべて平均的 日常行動しているが満足度、余暇活動は低い	女	無	やや重い	40, 50代
IV生活中心不満足型	27	外出することは少ないが家族依存 や満足度は高い	—	無	重い	40~60代
V満足自宅型	22	友人つきあいは多くないが行動面 では積極的	—	無	やや重い	60代
VI積極活動型	10		男	有	—	20, 40代

由」に限定されており、職業についているのは約7割である。

III「平均的満足型」は全体の約1/3 (51人) を数え、女性が60%を占めており、40, 50代合わせて約2/3を構成している。障害の種類別にみると「肢体不自由」を除いて、ほぼ平均して分散しているが「聴覚障害」がやや多い。そして約6割が無職である。

IV「生活中心不満足型」は女性の方がやや多く(56%)、年齢構成から見ると年配者に多く50, 60代で5割以上を占めている。全体の2/3は「肢体不自由」であり、「内部障害」も22%と多い。しかも働いていない人が8割を占めている。主観的な障害の程度についてこの型は図4に示すように「かなり重い」「やや重い」と答えたもの合わせて96%にのぼり、他の型に比べて認定されている客観的等級に対してかなりの相違をみせている。この点から自分の障害を「重い」と評価している人ほど「余暇・人間関係満足」が低いという関係を導びくことができる。

V「満足自宅型」はIVと比べて属性からみてやや似ているが、60代が半数を数え、50, 60代合わせると73%と大半を占めている。障害別にみると「視覚障害」と「内部障害」で45%を占めており、「肢体不自由」がVIに比べて少ない。職業の有無については77%が無職であり、図2にみるようにほとんど外出していないのが特徴で、しかも家族依存度が高く、満足度も高い。ただ、満足の意味は、与えられた環境に対して満足しているもので、自己の活動については満足しているタイプとはいえないだろう。

VI「積極活動型」は8割が男性であり、すべて職についている。年齢

は20代に多く、20、30代で5割を占めている。障害の種類でみると「肢体不自由」が50%と多い。図4に示すように障害の程度に対する自己評価はI「満足余裕型」と同様、「重い」と考える人は他に比べて多くはない。

以上のライフスタイルセグメントを整理したのが表10である。

## 6. 結語

われわれが、障害者問題に対する新たなアプローチの開発を試みるために用いたライフスタイル分析は、データのとり方の制約があったために必ずしも明解な議論として展開しえなかったが、いくつかの論点を提出しようとする。

1). 少なくともライフスタイル分析が障害者問題の視座の転換に対して実証的な裏づけを提供しようとするものであること。すなわち、ライフスタイルに関する属性には、性、年齢、職業の有無、障害の種類があげられるが、このことは障害者にとって disability の存在と職業の問題が重視されなくてはならないことを表わしており、通常導びかれる結論と同じものであること、加えて、他の属性についても十分な検討を加えているだけにこれらの問題を一層鮮明に位置づけることができる。

2). ライフスタイルの基本因子は、大きくは満足度因子と生活行動因子によって構成され、前者については「余暇・人間関係満足度因子」、後者については「日常行動因子」及び「余暇活動因子」があげられる。加えて、「友人ネットワーク依存因子」が重要な意味をもっている。その他、「家族ネットワーク依存因子」「親族ネットワーク依存因子」「近隣ネットワーク依存因子」の7つが基本因子を構成している。

3). ライフスタイルは、I「満足・余裕型」、II「不満足・余暇活動型」III「平均的満足型」IV「生活中心不満足型」V「満足自宅型」VI「積極活動型」の6グループに類型化がなされ、この類型による分散分析の結果はこのライフスタイルが極めて高い説明力をもつことを示している。

4). 障害者の満足度を説明しているのは、現実の等級ではなく、主観的な障害の評価であること。つまり、認定された等級よりも「軽い」と

思っている人は、余暇・人間関係に対する満足度も高く、反対に「重い」と感じている人は、不満足であったり、生活行動が消極的であるという関連がみられる。(図4参照)ただ、ライフスタイルと世帯収入及び個人収入とは有意差はみられないが、不満足グループを構成している「不満足・余暇活動型」の場合、約8割が職についていながら世帯収入は150万未満の層が8割を占めており、同様に「生活中心・不満足型」の場合、150万未満層は約6割と所得の低いことも無視できない。したがって、「生活の質」を実現するためには、職業と同時に所得保障を重視しなくてはならないこと、及び、これらに加えて「幸福感」の問題にとって、余暇・日常行動レベルでの条件づくりが大きな意味を有しているといえる。

5). 現段階の分析では、keyとなる自助性のカテゴリーに対して十分な検討がなされておらず、媒介項として着目している「社会的サービス」についても分析を展開していないため、あくまでライフスタイルのoverviewにとどまっているものであることを認めざるをえない。

#### 〔付記〕

本研究にあたっては、千歳市の「まちをよくする会」及び「身体障害者千歳支部」をはじめとする市民団体や一般市民、高校生の方々の多大な御協力を賜った。また、千歳市社会福祉協議会、千歳市福祉事務所、及び関係各位、とくに民生部長山野辺茂氏には特段の御配慮を賜ったことに対し厚く御礼申し上げる次第である。

この調査については学生、井上かおり、加藤悟志、工藤敏司、佐藤こずえ、長沼 修、村本真史の諸君の献身的な努力も記さなくてはならない。膨大な調査及びデータの整理とコンピューターの入力作業を可能にしたのは彼らの忍耐力である。また、この調査を未熟な筆者にまかせていただいた白沢久一・忍 博次教授には事務的なことについて御迷惑をおかけし、かつ懇切な御指導を賜ったことに対し謝意を申し上げる次第である。

分析過程において、北海道教育大学中野嘉弘教授にはSPSS国産プログラム(三宅一郎他の開発による)の使用をはじめ懇切なる御指導を賜った。

なお、計算作業については北海道大学大型計算機センター(HITAC-M200)のSPSSプログラムを使用した。

## Life-style of Persons with a Disability

—application of cluster analysis—

Naoto SUGIOKA

A disability may be defined as any chronic physical or mental incapacity resulting from injury, disease or congenital defect. The range of disabilities is broad indeed, and, moreover, we have equal chances to become disabled at anytime and anywhere. So we should identify ourselves as "potentially disabled". For these reasons, the concept of "the person with a disability" is to be accepted rather than "disabled person" as Beatrice Wright (1969) has proposed.

Our variables used for Life-style approach are composed of these five categories.

- a. self-independence : activities of daily living
- b. out-door activities : shopping, visiting friends, leisure activities, journey
- c. informal network : kinship, family, neighborhood, friends
- d. formal network : access to social institutions
- e. life satisfaction : leisure activities, family life, income, informal relationships

Seven principal components were extracted by factor analysis.

They are as follows.

1. satisfaction derived from leisure and interpersonal relationship
2. daily behavior such as shopping, visiting friends, and going to the post-office
3. leisure activities
4. dependence on friends
5. dependence on kinship
6. dependence on family
7. job satisfaction

Finally six types of Life-styles of the persons with a disability were distinguished by application of Q-mode cluster analysis to these seven factors. They cluster as follows.

- A. satisfied-balanced type
- B. dissatisfied leisure-oriented type
- C. standard satisfied type
- D. dissatisfied-leisureless type
- E. satisfied indoor-oriented type
- F. active type

Determinants of Life-style characteristics are 'occupation', 'age', and 'sex'. Six types of Life-style of persons with a disability are identified in the following matrix. (Table 1)

Table 1 Life-style segment

	FACTOR						SEX	AGE	OCCUPATION
	1	2	3	4	5	6			
A	H	H	H	H	-	-	M	20s, 30s, 50s	YES
B	L	-	H	H	H	L	M	30s, 40s	YES
C	H	-	L	H	H	-	F	40s, 50s	NO
D	L	H	L	-	-	L	-	40s, 50s, 60s	NO
E	H	L	L	L	L	H	-	60s	NO
F	-	H	H	L	H	H	M	20s, 40s	YES

H : High, L : Low, M : Male, F : Female